

文 藝

一二六

文 藝

病 む

岡 村 教 正

いたつきはいつ癒ゆるらむ夜のふけを時雨は雪となりたるけはひ
寝つゝ見るをちの高山うす暗く蔽ひ来るなり雪降るらしも
肉の痛み寝つゝすべなく耐へてをりここに觸るゝ夕しぐれ雲
街道の夕べつめたき北風に吹かれてバスの来る間をあゆむ
山里は松の内より谿々に杣の手斧のひどき透れる

歸 省

みちのくのみふゆの山に時雨ふる夕べは弱き身をぞなげかむ
はたれ残る山低く覆ふ雲寒し岡村正雄氏思へばかなしも

福島先生より
熊谷利道君より

ひさびさに聞くさと訛りひんがしの磬梯山は明けしらみつゝ
老いらくの父が手飼ひのカナリヤの聲すがすがと朝床に聞く

小鳥飼ひ鉢植を樂しむこの頃の父よまことに老いていませり
宵のほど風呂焚く吾れに聲かけて下士斥候か過ぎゆきにけり
斑雪野は霧のまぶかく垂れこめて伏したる兵ら未だ動かず
この路も幾年ぶりか陰町の翁飴屋はそのまゝにあり
微笑みて吾がまなかひに浮び來る集ひなりけりたゞ歸りたき
(身延歌會寄書)

岡山に遊ぶ

落ちつけぬ幾夜か經たり背戸に鳴く蛙のこゑは家思はしむ
すがすがと雨にぬれつゝ芍藥のいま四五日は咲くべく見えぬ
吾が髯を剃る娘子の岡山訛り聞きつゝうつゝまどろみにけり
夏來なばすがしからむとのらせしが梅檀の芽の顯ハナちて來にけり
(齊藤先生に)
二三日臥れば遠き母こほし松の枝に來て鳴く雀らよ

わか葉影たゝへてふかき朝廷に咲くべくなりぬ橘柑の白花
蘭草田に露の光れる野のうちを單衣すがしみ遠來つるかも
蘭草田はくがねの露をふゝみつゝこの明るさに涯しなく見ゆ
棕櫚の實は風に揺れつゝほろほろとこぼれて片寄る庭土の上に
かにかくに假の住居にやすらぎて培ふ背戸の胡瓜は伸びたり

朝雨に濡れつゝ庭の南天の花まさやかに白かりにけり
はづかなる庭の空地にトマト植ゑ伸びゆくほどに住まひ馴れつゝ
朝まだき經誦むさへやすがと山あぢさゐの眼に泌むる色
これの世のはかなき思ひ朝床に目醒めて吾れのなしといはなく
刈急ぐ蘭刈人らのむれたつを夕燒雲はうつろへにけり
驟雨清しけれども蘭草濡れゆくをあせりにあせり取りこむ村人
ひそやかに秋立ならし朝吸^{あした}ふ味噌蜆汁の舌にさやらふ
またの日はいつと思ひしが斯くは今日登りつゝゆく吾^あをうたがはず
(身延にて)

支那事變

千人針とみに殖えつゝ御さわがしなにか追はるゝ思ひにて行く
上等兵吾れに寄留を急げとてふるさとの父ゆ便りつきたり
夜くだちて蟲音は徹れますらをら修羅戰場に思ひ深からむ
寄留届すませし心ゆとりには未だ來ぬ動員令した思ひをり